

会議報告

First Annual Young Scholars Conference on Asian Security, May 21-24, 1985, Santa Barbara

太 田 亮

今回、私は、「第1回 アジアの安全保障に関する若手研究者の会議」(First Annual Young Scholars Conference on Asian Security)に出席した。以下では、会議の内容等を説明し、気づいたことを報告する。

会議は、カリフォルニア(米国)にあるクレアモント・マッケナ大学(Claremont McKenna College)の国際安全保障研究センター(通称ケック・センター, The Keck Center for International Strategic Studies)が主催した。全体テーマは、「アジアの安全保障に対する新しいアプローチ」(New Approaches on Asian Security)で、会議の主な目的は、アジア地域の安全保障研究にたずさわる若い研究者間の意見交換と親睦を深める事であった。

1985年5月21日から24日まで、サンタ・バーバラ・ビルトモア・ホテルで、アジア・太平洋地域9カ国から2人ずつ(但し中国からは1人)17人、メキシコ、西ドイツ、アメリカから各1人ずつ計20人が報告し討論した。ソ連、ベトナム、カンボジア、ニュージーランド等の国々からの参加者はなかった。

司会は、ケック・センター所長のP. E. ヘイリー(P. Edward Haley)とランド・コーポレーションのギー・ポーカー(Guy Pauker)が行ない、戦略研究者として有名なりチャード・ソロモン(Richard Solomon)が途中まで出席し、随時コメントをした。使用言語は英語であった。

会議は、9つのセッションにより構成され、各々、報告・コメント・討論が行われた。(各出席者のタイトルは会議配付資料に基く。)

セッション1——アジアの安全保障の諸要素

報告：M. R. Sukhamband Paribatra (タイ, チュラロンコン大学助教授)

コメント：Ryo Ota (太田 亮)

セッション2——アジアの安全保障に対する中国の見解

報告：Wang Jisi (王 緝思) (中国, 北京大学講師)

コメント：Young-su Ha (河 榮善) (韓国, ソウル国立大学)

Antonio Ocaranza (メキシコ, メキシコ文部省)

セッション3——アジアの安全保障に対するマレーシアの見解

報告：Noraini Abdullah (マレーシア, マレーシア国立大学講師)

コメント：Bilveer Singh (シンガポール, シンガポール国立大学講師)

セッション4——アジアの安全保障に対するフィリピンの見解

報告：Antonio Jamon (フィリピン, フィリピン大学講師)

コメント：Joseph Roach (オーストラリア, St. ジョン・フィッシャー大学)

セッション5——アジアの安全保障に対するタイの見解

報告：Pranee Thiparat (タイ, プリンストン大学大学院在学中)

コメント：Ikrar Nusa Bhakti (インドネシア, インドネシア科学院)

William Tow (南カリフォルニア大学助教授)

セッション6——アジアの安全保障に対するオーストラリアの見解

報告：Anthony Bergin (豪州, オーストラリア海軍大学講師)

コメント：Hajime Izumi (伊豆見 元) (日本, 東京外国語大学講師)

セッション7——アジアの安全保障と地域機構

報告：Tan Teng Lang (陳 升瑯) (シンガポール, シンガポール国立大学講師)

コメント：Kai Fabig (西ドイツ, ハンブルグ大学ディプロマ)

セッション8——アジアの安全保障に対するインドネシアの見解

報告：A. R. Sutopo (インドネシア, 戦略・国際研究センター, ジャカルタ)

コメント：Zinah Anwar (マレーシア, フレッチャー・スクール在学中)

セッション9——アジアの安全保障に対する韓国の見解

報告：Young-koo Cha (車 榮九) (韓国, 戦略研究所, 企画・政策担当)

コメント：Alexander Magno (フィリピン, フィリピン大学助教授)

この他、アジア財団の代表者や安全保障に関心のあるビジネスマンが出席し、発言した。

私に割り当てられた役目は、セッション1での報告に対するコメント

をする事であった。報告者のパリバットラ氏は、オクスフォード大学で教育を受けた端正で礼儀正しく、きわめて頭の回転のはやいタイ人紳士である。彼のペーパーが私の元に届いたのは出発の前々日で、飛行機の中やホテルの個室でコメントを考えることとなった。

会議はおおむね冷静で学究的な雰囲気のうちに進み、各国の見方を述べる際にも、ほとんど宣伝臭はなかった。

かなりの出席者がアジアの安全保障に対する主な不安定要因として、ソ連・中国・ベトナムをあげていた。その中で異色だったのは、フィリピンからの出席者2人が、フィリピンへの最大の「脅威」は、アメリカ政府とアメリカに本社を持つ多国籍企業であると主張し、米国人出席者たちと鋭く対立した事であった。その他、中国人出席者が眼前で、「中国は、アジアの安全保障にとり、〈脅威〉である」とくりかえし言及されても、決して感情的対立には至らなかったのも印象に残った。

討論内容はかなり広範囲にわたったが、大きく四つに分類できるようであった。第一は、インドネシア、タイ、マレーシアなどの東南アジア諸国、第二は、フィリピン、第三はオーストラリア、第四は、韓国、中国、日本などの北東アジア諸国についての討論である。東南アジア諸国は、カンボジア・ベトナム問題とイスラム分離主義等による国内政治の不安定の存在という共通点があり、一括して議論された。フィリピンについては、政権交代が近いと見られ、かつ交代に伴うとみられる政治的混乱の中で、在比米軍基地の移転があり得べき事として特に詳しく討議された。オーストラリアは、現在のところ、アジア地域に対して軍事的野心を持っていないとの意見が大勢を占めた。北東アジア諸国に関しては、朝鮮半島において米ソ日中、南北朝鮮が複雑なパワー・ゲームを展開している状況についての、予定時間を大幅に超過する議論となったが、不用意に紛争を引き起こすべきではないとの点では意見がほぼ一致した。

会議後の活動として、まずクレアモント大学宿舎に移動、そこを根拠地としてワイン工場(複数)や南カリフォルニア大学を見学した。また、

その間にランド・コーポレーション(Rand Corporation, 米政府にきわめて近い有力なシンク・タンク)を訪れ、ソロモン、ジョナサン・ポラック(Jonathan Pollack)等のアメリカにおける第一級の国際政治学者との討論の機会を持った。

クレアモントに移ってからは自由時間が多く、^{インフォーマル}非公式な議論が連日深夜まで続いた。ほとんどの人がお互いに友人となり、将来だれかが政治犯となった時には、「国際的に」援助しようとかいう「約束」までかわされ、和気藹藹とした雰囲気であった。この原稿執筆時まで、この約束は発動されていない。

29日、ワシントン 特別区に飛び、31日まで対外政策に関係する4つの機構——議会の外交委員会、国家安全保障会議(NSC)、國務省、国防総省——を訪問し、政策スタッフによる説明をきいた。彼らの説明の中で、「アジアの安全保障の面で、アメリカの主要な関心は日本と中国である。東南アジア諸国のかかえる問題はおおむね地域的なものである。」という主旨の発言が続き、東南アジアからの参加者は不満をいだいたようであった。やや感情を害した仲間の1人が私に向かい、「米国からお墨付きをもらったね」とつぶやいたのが、妙に印象に残った。6月1～2日は、自由行動にあてられ、私は国立公文書館(the National Archives)などを見学した。

全体として、会議と会議後の活動は成功したといえよう。スタッフの尽力にもかかわらず、帰国便予定変更などで手間どる事もあったが、かえって参加者同士の親睦を深め、相互援助のネットワークの形成に役立ったといえる。しかし、会議の構成方法や議論内容に問題がなかったわけではない。セッションは、各国の見解の並列ではなく、アジア太平洋地域の安全保障構造に根ざす問題——たとえば、ソビエト海軍「増強」の政治的意味とか、日本の「防衛力」増強の分析など——を整理しての報告・議論の方が実り多かつたであろう。会議では、他国との係争のある場合(たとえばインドネシアとマレーシア)には報告と討論の重複があった。

また、主催者の配慮により、アジアの安全保障に対する日本の見解報告は省かれた。

討論について気づいたのは、討論者の関心が東南・北東アジア、オセアニア地域の三つに分かれ、一つの地域に発言の多い人は他の地域については余り発言しない傾向があった事である。極論すると出席者の関心にむらがあった。また、ソロモンも指摘したが、議論が国家関係に集中しすぎ、イスラム分離主義やバリバットラ氏がペーパーで触れた統治の正統性の問題の如く、脆弱な国家体制そのものに関する意見が少なかった。

ワシントン滞在中の経験をも考えると、アジアからの参加者には、自国に対してアメリカはもっと関心を向けて認めてほしいという願望があるように思えた。前述の〈関心のむら〉に基くパーセプション・ギャップとこの屈折したプライドは、今後アジア太平洋諸国と日本の関係においてもまたアジアの安全保障や国際政治を論じる上でも、きわめて重要となるであろう。

最後に、この場を借りて、会議出席の機会を提供して下さった平和・安全保障研究所(特に大西常務理事と西原教授)、経済的な面で支持して下さったアジア財団(the Asia Foundation)、会議参加中お世話になった方々、会議を主催したクレアモント大学ケック・センターのスタッフ、そして出席を快諾して下さった国際基督教大学社会科学研究所に感謝の意を表する。